

保有地の復原から考察する歴史時代における 散居村落・小村落の成立と構造 — 胆沢扇状地の事例・(2) —

岡 村 光 展

- I はしがき
- II 胆沢川上流部の狭長な段丘面上の各「字」における寛永期名請人の土地保有形態の復原
- III まとめと考察

キーワード：在家，屋敷名，家号（屋号），同族的紐帯の存否，
東日本型散居村落・小村落，東日本型集居村落

I はしがき

筆者はこれまで、胆沢扇状地の散居集落に関して、3つの論稿¹⁾²⁾³⁾を発表してきた。このうち、第3番目の、「保有地の復原から考究する歴史時代における散居村落・小村落の成立と構造—胆沢扇状地の事例・(1)—」では、近世初頭における名請人の保有耕地の復原を通して、中世の在家と散居村落の成立・展開のメカニズムまで、考察を進めた。その際、寛永年間の仙台藩の検地帳に表示された名請人の保有地積と、それを継承した明治初頭における各農家の所有地積との間に、この間の保有耕地の増減分を除けば、差は僅少であることを知り得た。このことは、前稿における事例で、字金入道について、寛永期名請人の保有貫文高が幕末まで変わらず継承されているうえに、明治初頭の農家の所有地積が、寛永期の名請人の保有地積とほとんど一致していたことが判明したことからも、実証される。

仙台藩の寛永年間検地帳⁴⁾は、石高本位制に移行した近世に入っても、中世に用いられていた貫

文高表示を一筆ごとに並記しているのが特色である。広大な農村地域を領有していた東北地方の諸藩において、はたして、近世初頭に実測による検地が実施できたのか、それとも中世の在家役屋体制の枠組を利用しての、屋敷地を核とする保有貫文高の把握であったのかは、中世の土地制度の実態を探るうえでも今後の大きい研究課題であろう。同様に、明治期初頭における土地面積把握の方法も、今後探究されるべきであろう。それはともかく、近世初頭における検地帳の地積と、明治初頭の地積とを直接対照する方法の有効なことを見出しえたことは重要である。

今回、研究対象とした胆沢川上流部地域の狭長な河岸段丘面は、上部の段丘の崖下から得られる用水の便も良く、古くからの居住も進み、縄文期や弥生期の遺跡もみられる。中世の在家を継承した寛永期名請人の屋敷地の分布密度も高い。筆者は先に、この地区において近世初期に存在した小同族集団は、集居村落の原型であるとの予察を示しておいた^{前注1)}。したがって、近世初頭における屋敷地と名請人の保有耕地の正確な復原、および同族的紐帯の分析は、集・散両居住様式成立のメカニズム、土地制度史における中世の在家の実態の解明のためには、有用であると考えられる。



第1図 胆沢川上流部の河岸段丘の地区における「字」の区画
 明治初頭期の「字」の区画を、1982年の胆沢町作成の地図上に復原した。

II 胆沢川上流部の狭長な段丘面上の各「字」における寛永期名請人の土地保有形態の復原

この地区においては、かつて、上流方面（西方向）から、板渡、上鹿合、北中沢、南中沢、下鹿合の5字が存在していたが、寛永期名請人の屋敷が集中するのは、上鹿合、北中沢、下鹿合の3字である。この3字に、大歩、上堰袋の2字を加えた5つの「字」について分析を進めたい（第1図）。

〔字上鹿合〕

まず、寛永期名請人の数も多く、本・分家関係も把握できる字上鹿合から、検討を始めたい。この字内の西寄りに、加藤系の屋敷が集中している（第2図）。このうち、明治の上鹿合屋敷加藤源内家は、寛永の上鹿合屋敷平七の家系である。この隣に位置する沢口屋敷加藤源左エ門家も、寛永の沢口屋敷新百姓彦惣の家系であるが、上記上鹿合屋敷加藤源内家からの古い分家である。寛永期以前における古い

本・分家関係にありながら、その屋敷名を異にすること自体、在家の独立的性格を示している。同じ例は、後述するごとく、字大歩においてもみられるが、上鹿合屋敷と沢口屋敷の場合は、隣り合っている、別個の屋敷名を継承している点が注目される。

両屋敷から南に少し離れた欠の下屋敷加藤源蔵家が、寛永の欠屋敷新百姓帯刀の家系に当るとするならば、上述2軒の加藤家に加えて3軒の加藤家、すなわち、屋敷名（在家の名称）を異にする3つの在家が、コンパクトな同族集団を形成していたことになる。因みに、屋敷地の地積を、寛永期と明治期とで比較すれば、寛永の上鹿合屋敷平七の1反5畝26歩と明治の加藤源内の2反1畝6歩、沢口屋敷新百姓彦惣の1反6畝24歩と加藤源左エ門の1反2畝、欠屋敷新百姓帯刀の1反24歩と加藤源蔵の1反2畝と、中世における在家の核であった寛永期の屋敷地が、いずれも明治期にまでその名称と共に継承されていることがわかる。明治期の状態から復原される3名請人の保有耕地も、錯圃形態を採っていない。

近世において形成された本・分家関係については、明治の上鹿合屋敷加藤秀吉家と、幅屋敷加藤円太家

第1表 寛永18（1641）年と明治初頭の、字「上鹿合」における居住者の保有（所有）地積の比較

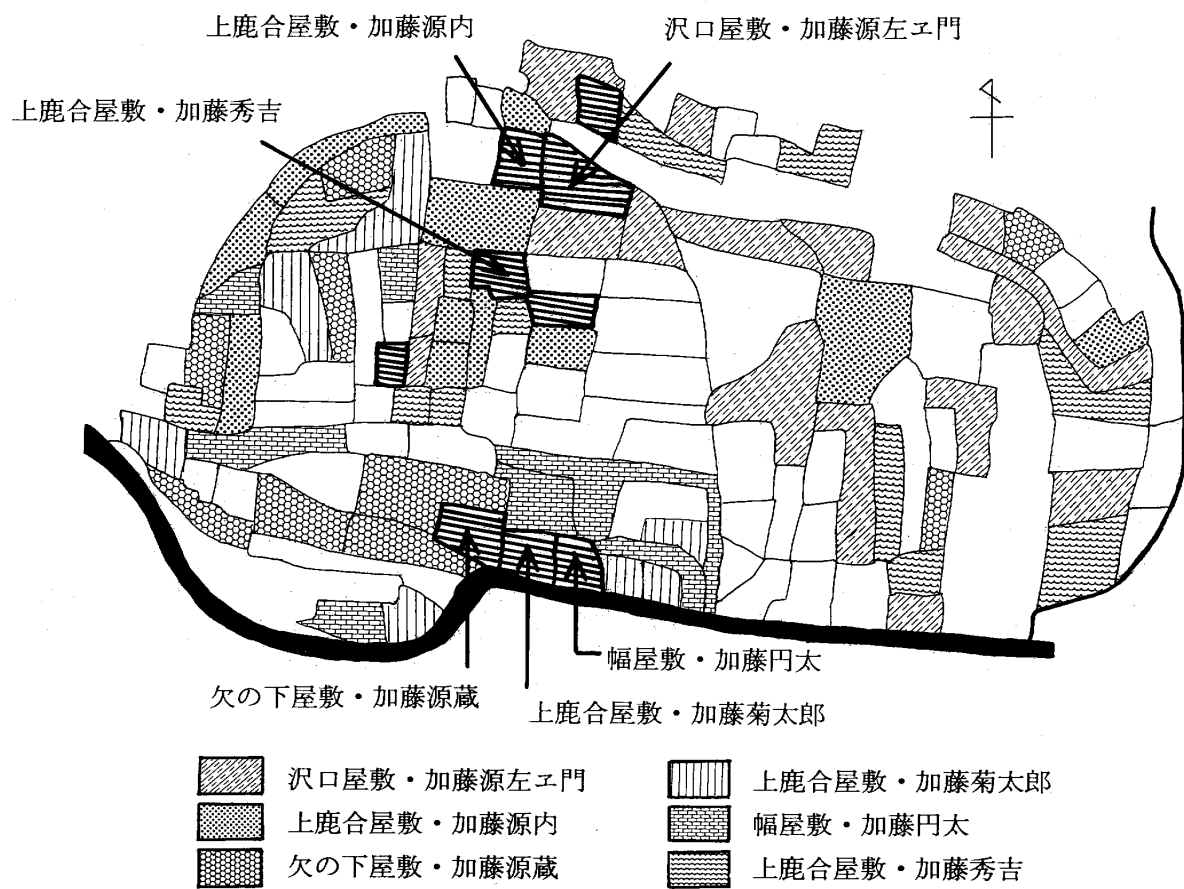
寛永18年

屋敷名	名請人	田	畑	屋敷	合計
		町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩
上鹿合	平七	・7・9・13	・7・1・01	・1・5・26	1・6・6・10
沢口	(新)彦惣	・8・0・29	・3・7・21	・1・6・24	1・3・5・14
野際	(新)休三郎	・8・7・23	・2・9・08	・1・5・09	1・3・2・10
荒田	覚右エ門	1・3・5・04	・4・7・16	・・9・10	1・9・2・00
欠	(新)帯刀	・・7・14	・3・9・22	・1・0・24	・5・8・00

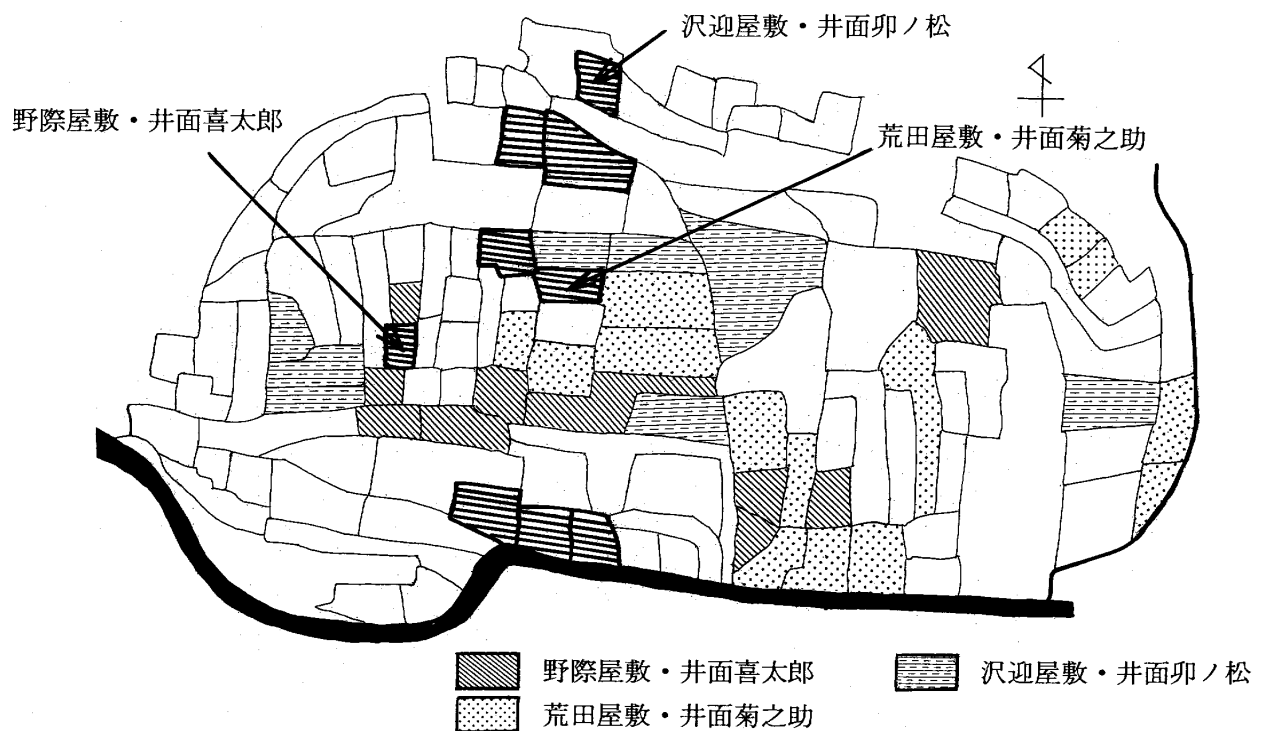
（新）は新百姓

明治初頭

家号 (屋敷名)	居住者	田	畑	宅地	合計
		町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩
上鹿合	加藤源内	・9・5・22	・6・3・22	・2・1・06	1・8・0・20
〃	加藤菊太郎	・・・0	・3・8・01	・1・0・15	・4・8・16
〃	加藤秀吉	1・5・1・08	・9・6・26	・・2・27	2・5・1・01
沢口	加藤源左エ門	1・7・2・14	1・2・5・12	・1・2・00	3・0・9・26
欠ノ下	加藤源蔵	・6・1・29	・6・9・21	・1・2・00	1・5・3・20
幅	加藤円太	・5・6・04	・2・5・28	・・8・24	1・0・0・26
野際	井面喜太郎	1・8・3・16	・4・6・08	・・6・12	2・3・6・06
沢迎	井面卯ノ松	・5・6・16	・3・3・20	・・3・22	・9・3・28
荒田	井面菊之助	・6・8・18	・4・3・20	・・7・12	1・1・9・20



第2図 明治初頭の字「上鹿合」における土地所有の状態(1) —— 加藤家系 ——



第3図 明治初頭の字「上鹿合」における土地所有の状態(2) —— いのち 井面家系 ——

が、加藤系総本家（明治の加藤源内家、寛永の上鹿合屋敷平七の家系）からの分家である。

加藤系における分家の成立期と屋敷名との関係が明瞭に示しているように、寛永検地帳に独立した名請人として登録された中世以前における分家は、本分家間の距離や分家の位置には関係なく、本家とは異なる屋敷名を冠している。すなわち、分家も独立した1個の在家であったことを示している。これに対して、近世における分家は、分家の屋敷地が本家に隣接する場合には本家と同じ屋敷名を（場所が同じなので）、本家とはかけ離れた場所に分家する場合には、その土地の名称を新しい屋敷名に用いているために、本家とは異なる屋敷名を冠していることが多いことがわかる。時代により、分家の屋敷名の冠し方に相違のあることが判明する字であるが、中世における屋敷名の付し方（すなわち在家の名称）からは、小農民としての在家の独立性の高さが想起される。そこに、強固な同族的紐帯が成立する余地は無く、このことが散居地域における在家の特質と言えよう。

字上鹿合の中央部には、同字におけるもう一つの系統である井面系の屋敷が分布している（第3図）。このうち、明治の野際屋敷井面喜太郎家は、井面系

の総本家であり、筆者の過去帳の分析によっても天和2年没の喜兵衛まで遡及できる。これが寛永の野際屋敷新百姓休三郎の家系に当たると考えられる。同家からの古い分家と考えられる、明治の沢迎屋敷井面卯ノ松家は、代数百姓書上げの家系上に、明治と同じ名前が存在していることから、寛永の荒田屋敷覚右エ門の家系に当たることがわかる。屋敷名の変化は、屋敷地の移転などの理由によるものと思われる。本家の野際屋敷、分家の荒田または沢迎屋敷、いずれにせよ、古い同族関係にある2人の寛永名請人の屋敷名（すなわち中世在家の名称）の違いは、前述の加藤系同様、在家の独立的性格を示している。

〔字北中沢〕・〔字下鹿合〕

次に、字上鹿合に東隣する字北中沢には、寛永期に中沢屋敷四郎左エ門、中鹿合屋敷新百姓清三郎などの4名請人が居を構えていた。代数百姓書上に登録された中沢屋敷安倍四郎左エ門（専右エ門）の家系は、明治には下鹿合屋敷（庄屋）の屋敷名を冠しているが、これが寛永の中沢屋敷四郎左エ門の家系に当たる。寛永の四郎左エ門の保有地積3町6反4歩は、明治の安倍四郎左エ門（専右エ門）の2町5反2畝7歩に至って少し減少しているが、これは分

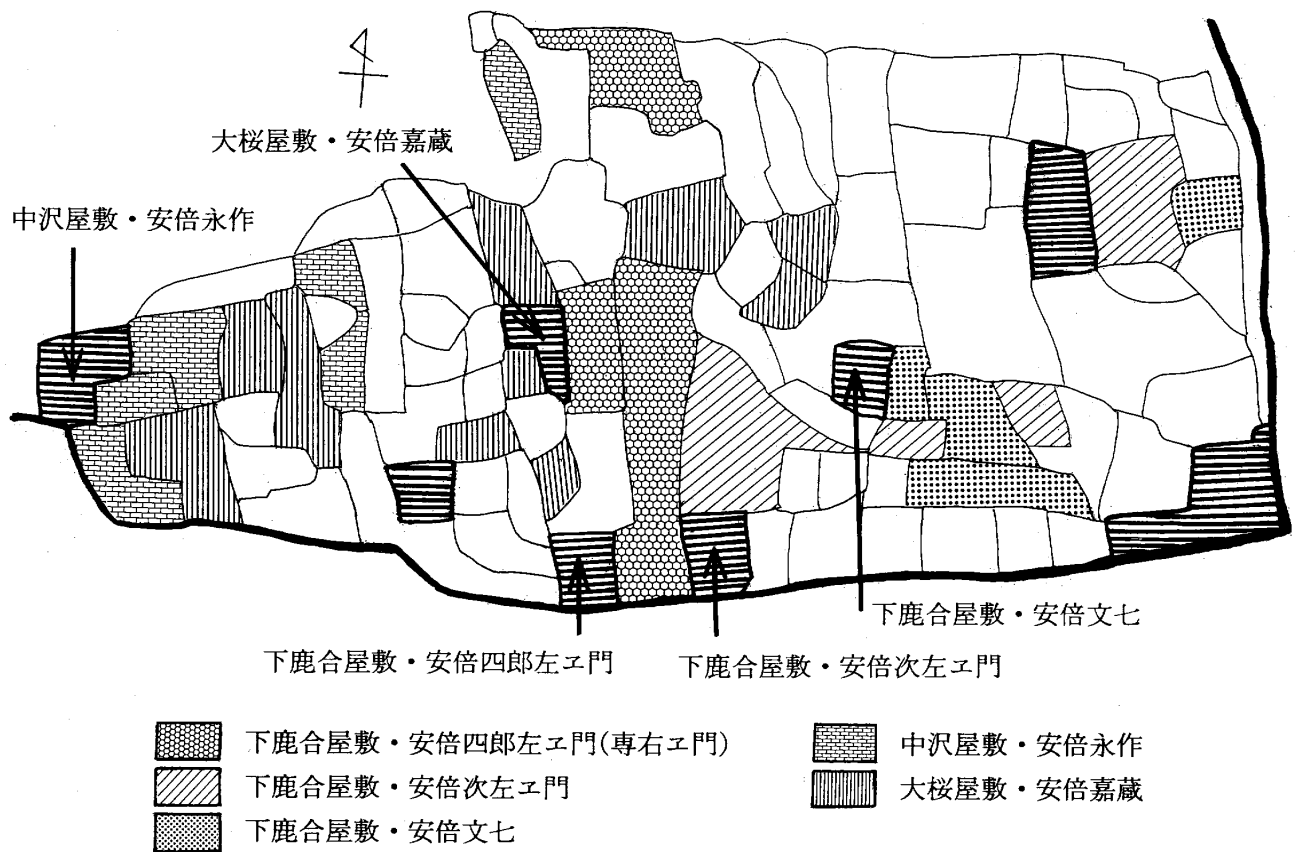
第2表 寛永18年（1641）と明治初頭の、字「北中沢」における居住者の保有（所有）地積の比較

寛永18年

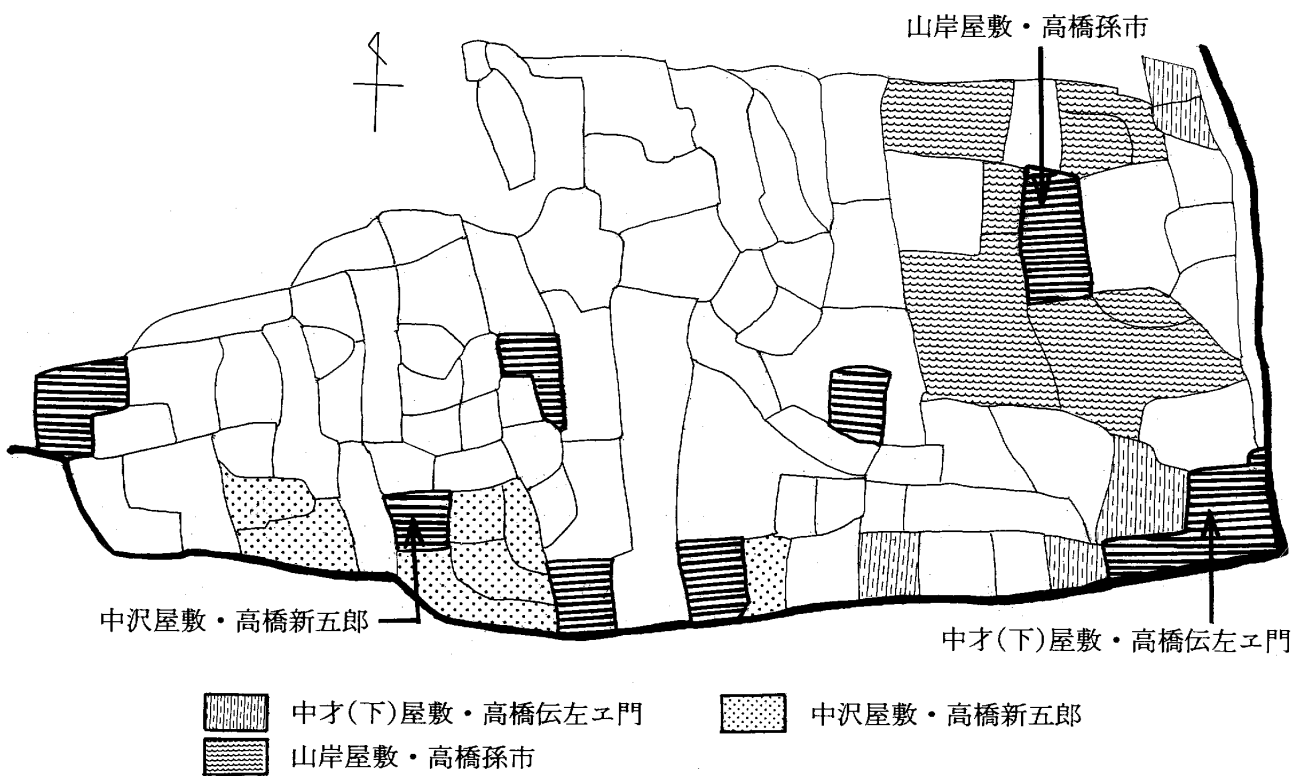
屋敷名	名請人	田 町・反・畝・歩	畑 町・反・畝・歩	屋敷 町・反・畝・歩	合計 町・反・畝・歩
中鹿合	(新) 清三郎	・ 2 ・ 7 ・ 12	・ 5 ・ 6 ・ 23	・ ・ 3 ・ 00	・ 8 ・ 7 ・ 05
中沢	四郎左エ門	1 ・ 9 ・ 4 ・ 12	1 ・ 5 ・ 2 ・ 28	・ 1 ・ 2 ・ 24	3 ・ 6 ・ 0 ・ 04
山岸	右馬之丞	1 ・ 0 ・ 6 ・ 23	・ 6 ・ 0 ・ 02	・ 1 ・ 0 ・ 12	1 ・ 7 ・ 7 ・ 07
中在	隼人	1 ・ 2 ・ 3 ・ 19	1 ・ 2 ・ 8 ・ 10	・ 1 ・ 3 ・ 06	2 ・ 6 ・ 5 ・ 05

明治初頭

家号 (屋敷名)	居住者	田 町・反・畝・歩	畑 町・反・畝・歩	宅地 町・反・畝・歩	合計 町・反・畝・歩
中沢	阿部奎兵衛	・ 9 ・ 3 ・ 19	・ 4 ・ 2 ・ 19	・ 1 ・ 5 ・ 00	1 ・ 5 ・ 1 ・ 08
〃	安倍栄作	・ 5 ・ 0 ・ 25	・ 4 ・ 0 ・ 05	・ 2 ・ 0 ・ 09	1 ・ 1 ・ 1 ・ 09
大桜	安倍嘉蔵	・ 7 ・ 9 ・ 05	・ 5 ・ 9 ・ 05	・ ・ 6 ・ 00	1 ・ 4 ・ 4 ・ 10
下鹿合庄屋	安倍四郎左エ門 (専右エ門)	1 ・ 1 ・ 8 ・ 17	1 ・ 1 ・ 0 ・ 23	・ 2 ・ 2 ・ 27	2 ・ 5 ・ 2 ・ 07
下鹿合竹原	安倍治左エ門	・ 8 ・ 6 ・ 12	・ 7 ・ 2 ・ 20	・ 1 ・ 2 ・ 05	1 ・ 7 ・ 1 ・ 07
下鹿合新屋	安倍文七	・ 1 ・ 2 ・ 25	・ 5 ・ 0 ・ 19	・ 1 ・ 2 ・ 10	・ 7 ・ 5 ・ 24
山岸	高橋孫市	・ 4 ・ 1 ・ 29	・ 2 ・ 6 ・ 24	・ 2 ・ 7 ・ 04	1 ・ 0 ・ 5 ・ 13
山岸岩ノ上	高橋新五郎	・ 7 ・ 0 ・ 28	・ 4 ・ 2 ・ 23	・ 1 ・ 0 ・ 29	1 ・ 2 ・ 4 ・ 20
中才(在)・下	高橋伝左エ門	・ 7 ・ 5 ・ 16	・ 7 ・ 7 ・ 07	・ 1 ・ 8 ・ 20	1 ・ 7 ・ 1 ・ 13



第4図 明治初頭の字「北中沢」における土地所有の状態(1) —— 安倍家系 ——



第5図 明治初頭の字「北中沢」における土地所有の状態(2) —— 高橋家系 ——

家派出によるものである。

四郎左エ門の屋敷の近くには、同じ下鹿合の屋敷名を冠する安倍家が2軒存在し、このうち下鹿合・竹原屋敷安倍次左エ門家は、筆者の過去帳の分析によっても、享保3年没の権十郎娘まで遡及できる。この際、寛永の中沢屋敷・四郎左エ門の3町6反もの耕地は、到底手作り不可能であり、近世に分家として独立したかに見える本家と同一屋敷名を冠した経営体（農家）も、寛永名請人の保有地の中に含まれていたものと考えられよう。因みに、明治の下鹿合屋敷3軒の安倍家の遠距離分を除く所有田の合計は1町7反8畝21歩、所有畑屋敷（遠距離の畑を除く）の合計は2町2反2畝6歩、両者の合計は4町27歩となる。これらは、寛永の四郎左エ門の保有田の地積1町9反4畝12歩、畑屋敷1町6反5畝22歩、両者の合計3町6反4歩に近いことがわかる。

次に注目されるのは、この字北中沢と、その下手側に隣り合っていた字下鹿合とに、1軒ずつ存在している中才（中在または中齋とも呼ばれる）屋敷である。字北中沢における中才・下屋敷高橋伝左エ門家は、筆者の過去帳分析によっても、また「代数百姓書上」からも、寛永の中在屋敷隼人の家系であることがわかる。当家からの古い分家と伝えられる字下鹿合の中才屋敷高橋権治郎家は、筆者の過去帳分析からは、延享年間まで遡及できる。

ところで、明治期の2軒の所有地積の和が、寛永の隼人の保有地積とほとんど一致している。明治期における2軒の中才屋敷高橋家の所有田は、それぞれ、7反5畝16歩と、3反4畝19歩で、その和の1町1反5歩が、隼人の保有田の1町2反3畝19歩に

当たる。さらに2軒の所有畑の7反7畝7歩と3反8畝5歩の和1町1反5畝12歩は、隼人の保有畑の1町2反8畝10歩に当たる。また、隼人の屋敷1反3畝6歩は明治の2軒の宅地面積の合計の2反8畝12歩よりも、1反5畝余少ない。しかし、畑・屋敷面積で比較すれば、隼人の畑・屋敷は1町4反1畝16歩、明治の2軒の畑・宅地面積の合計は1町4反3畝24歩で、両者はほぼ一致している。さらに、明治の2軒の総所有地（田・畑・宅地）面積の合計2町5反3畝29歩は、隼人の2町6反5畝5歩にほぼ一致している。このように、明治の2軒の中才（中在）屋敷高橋家の所有地こそ、寛永の隼人の保有地であったことがわかる。

筆者は先に、字金入道と字八幡屋敷の事例について、明治期における複数の農家の所有地こそ、寛永期の1人の名請人の保有地そのものであることを指摘して、寛永検地当時において、複数の経営体（農家）が1名請人を構成していたことを示しておいた。隼人の場合は、字を越えても同族関係にあり、かつ同一屋敷名を冠している複数の経営体（農家）が、1寛永期名請人（1在家）を構成していたことが重要である。同じ屋敷名を有する複数の経営体（農家）が、字を越えるほどの距離を隔てていてさえ、1名請人（1在家）を構成していた事実は、前稿において指摘しておいた字金入道や字八幡屋敷の事例のように、屋敷地が近接していた場合には、紛れも無く同様な構造であることを裏付けるものと言えよう。

歴史学においては、中世の大土地保有の在家・名主が分解し、太閤検地を境に、通常規模の本百姓体制が確立するというのが通説であるが、はたしてそ

第3表 寛永18年（1641）と明治初頭の、字「下鹿合」における居住者の保有（所有）地積の比較

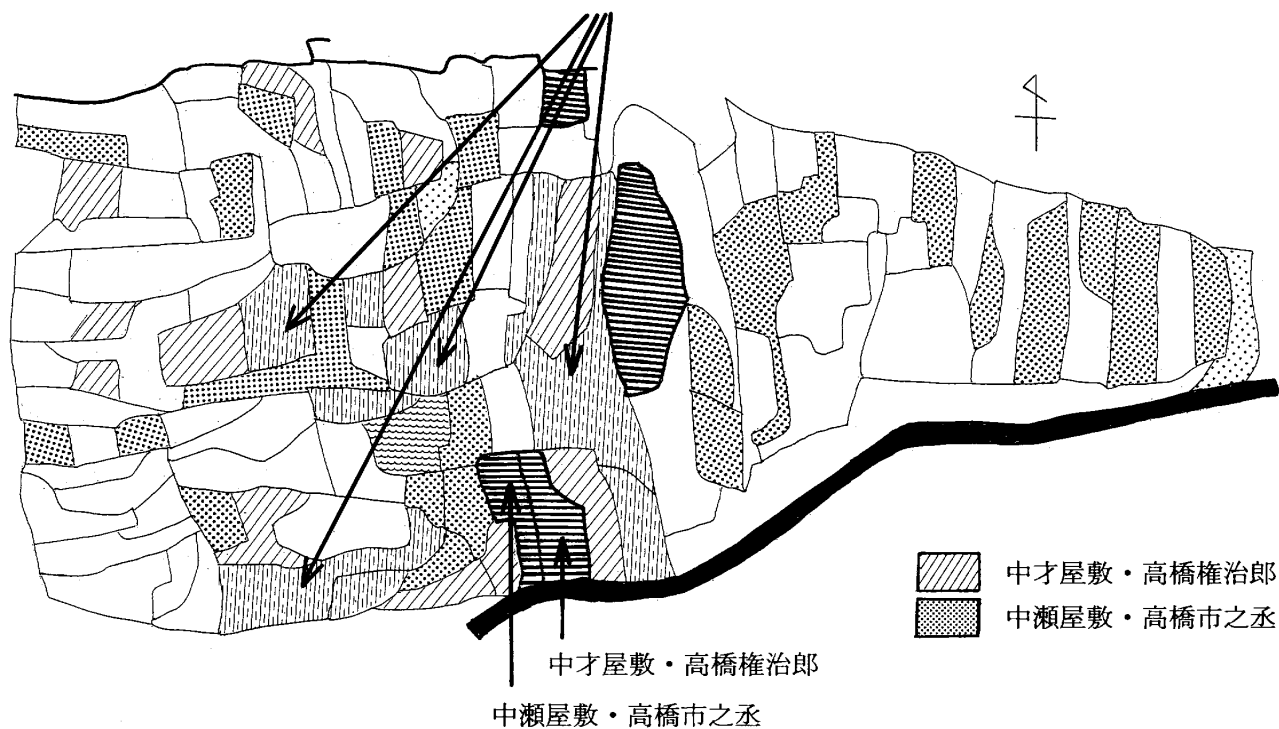
寛永18年

屋敷名	名請人	田 町・反・畝・歩	畑 町・反・畝・歩	屋敷 町・反・畝・歩	合計 町・反・畝・歩
中在	隼人（「字北中沢」の隼人に同じ。保有地も含まれている。）				
符金	小吉	・8・9・28	・7・4・23	・1・4・12	1・7・9・03

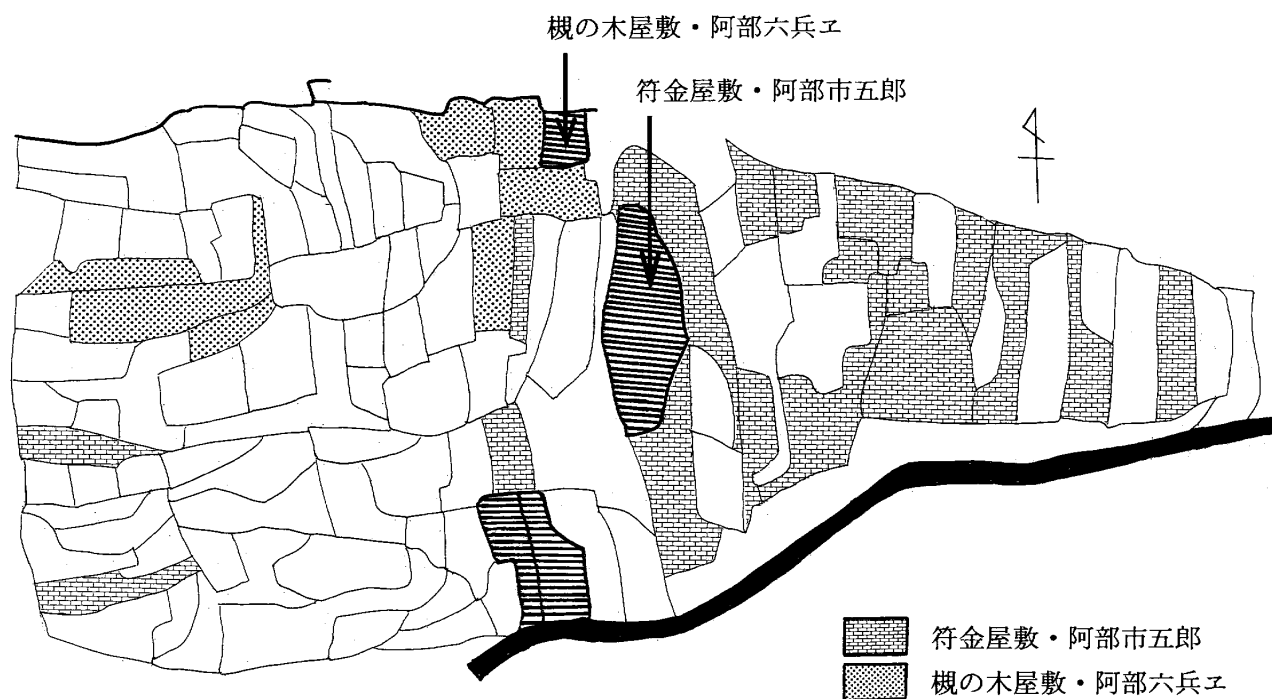
明治初頭

家号 （屋敷名）	居住者	田 町・反・畝・歩	畑 町・反・畝・歩	宅地 町・反・畝・歩	合計 町・反・畝・歩
中才（在）	高橋権治郎	・3・4・19	・3・8・05	・・9・22	・8・2・16
符金	阿部市五郎	・7・5・01	・7・3・04	・1・5・04	1・6・3・09
中瀬	高橋市之丞	・9・1・22	・8・3・07	・1・2・11	1・8・7・10
槻の木	阿部六兵衛	・4・3・16	・3・1・01	・・5・15	・8・0・02

西隣の字「北中沢」に居住している中才(下)屋敷・高橋伝左エ門の所有地



第6図 明治初頭の字「下鹿合」における土地所有の状態(1) —— 高橋家系 ——



第7図 明治初頭の字「下鹿合」における土地所有の状態(2) —— 阿部家系 ——

うであろうか。古文書のみでは解明が不可能な村落構成の実態に関しては、考古学⁵⁾の成果も援用して、再検討が求められよう。集約的な労働力の投下が必要な水田経営を柱とする限り、自己の経営耕地にほど良く近接できる場所に居を構える方が望ましいからである。

なお、屋敷名は、もともと、所在する屋敷の地名、すなわち屋敷地の名称である。隼人のように、1名請人が字を越えるほど距離を隔っても、同一屋敷名を冠した複数の農家から構成されていたのは、それが古い同族関係の上に立脚した1在家に他ならなかったからである。古い同族関係下にあっても、同一在家でなければ、近距離であっても別の屋敷名を冠することは、すでに字上鹿合の加藤家系についても示した。この下鹿合の中才屋敷の隣の屋敷名も「中瀬屋敷」であり、場所が同じでも、同一在家に属さない限り、屋敷名は異なることを示している。

【字大歩】

字大歩に関しては、前稿においても触れたごとく、1つの字に瀧ノ上屋敷新百姓彦惣、大歩屋敷平八の2名請人が居を構えていた（Ⅱタイプ）。後者の当主である阿部謹一氏への聞き取りによれば、同家は、先祖が前九年の役で没した安倍一族を埋葬したと伝えられるほどの旧家である。寛永検地帳に、屋敷名を異にする別個の名請人として登録されていることが示しているように、両者はまったく別個の在家である。前述の中才（中在）屋敷とは対照的である。

字の境界を越えて距離を隔てても同一の在家を構成したり（中在屋敷の2軒）、別個の在家であったり（瀧ノ上屋敷と大歩屋敷）の相違が、何に起因す

るかは不明である。後者の場合は、本・分家関係とは言っても、各々の居住の歴史が古く、中世末～近世初頭において、その同族意識もほとんど消滅していたと考えられよう。既に触れた、字上鹿合における加藤系の上鹿合屋敷と沢口屋敷の事例と同様である。これとは逆に、中才（中在）屋敷の2軒は、近世初頭期に、同族意識が存続していたものと考えられる。

【字上堰袋】

前稿で取り上げた字金入道よりは下流部で、同じく胆沢川に面した字上堰袋は、現在は水田のみを残しているが、明治期初頭には、4軒の農家が存在していた。さらに、寛永期には3人の名請人が居を構えていた。明治の4軒のうち、上関袋屋敷阿部甚之丞家は、寛永の上関袋屋敷弥一郎の家系に、関袋屋敷松平種蔵家は寛永の関袋屋敷外記の家系に、雪馬屋敷渡辺茂右エ門家は寛永の雪馬屋敷新百姓勘三郎の家系に、それぞれ当たる。

耕地面積を寛永と明治とで比較すれば、寛永の上関袋屋敷弥一郎が、明治期に減少している以外は、寛永と明治とで大きい差は無い。弥一郎の減少分は、寛永期には未だ存在していなかった明治の川前屋敷阿部今朝之丞家の分である。こうして、明治期の土地保有形態に基づいて、1つの字内における複数の寛永期名請人（複数の在家）の土地保有形態が、完全に復原される。貫文高で比較しても、幕末における上関袋屋敷の保有貫文高は973文、川前屋敷は523文で、両者を合わせた1496文（1貫496文）は、寛永の上関袋屋敷弥一郎の1459文にはほぼ一致している。さらに、幕末において関袋屋敷が保有していた1719

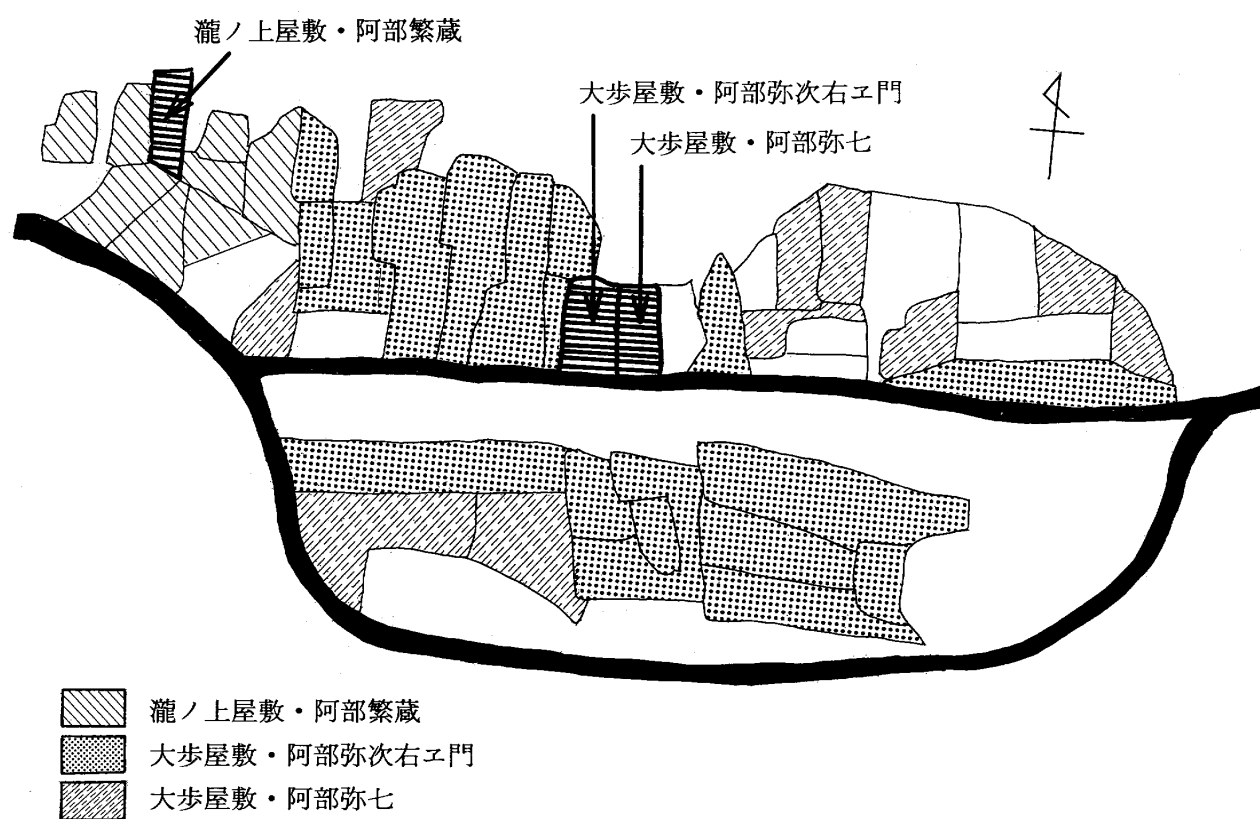
第4表 寛永18年（1641）と明治初頭の、字「大歩」における居住者の保有（所有）地積の比較

寛永18年

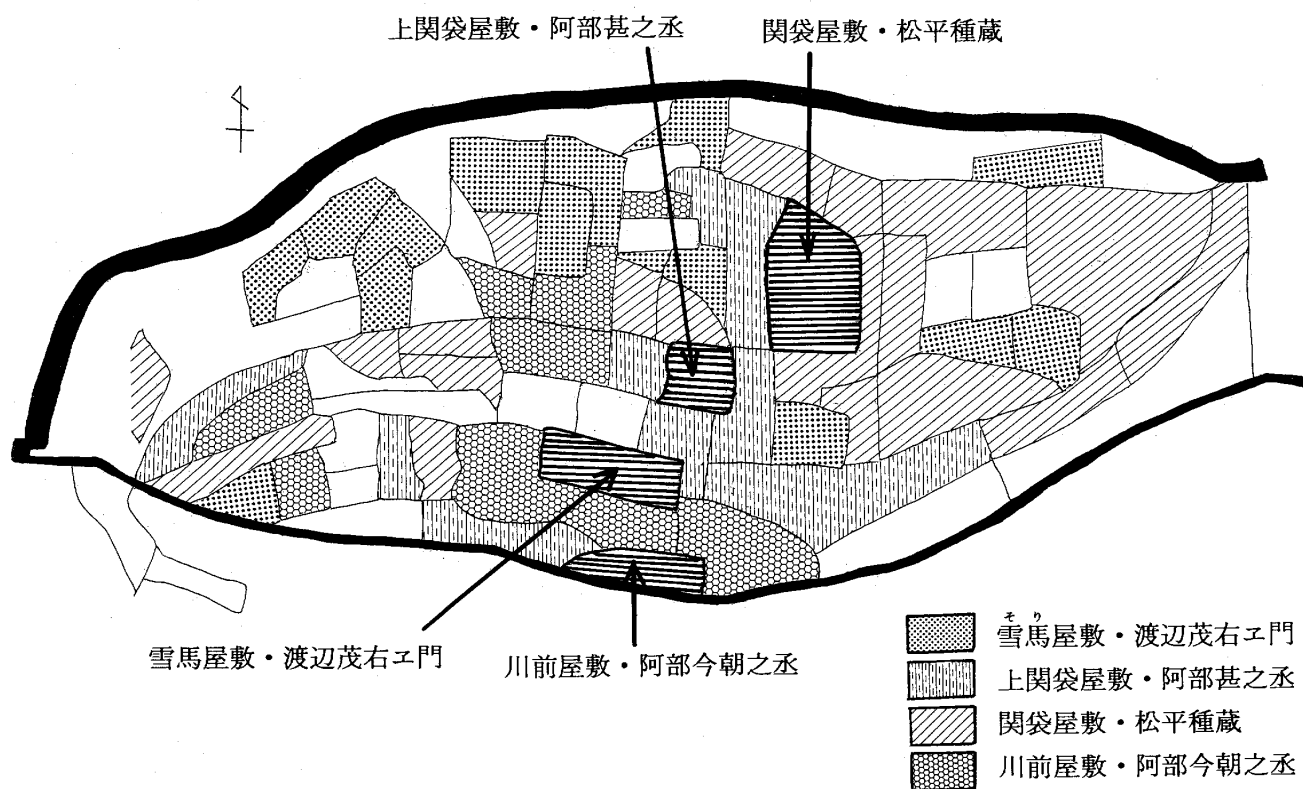
屋敷名	名請人	田 町・反・畝・歩	畑 町・反・畝・歩	屋敷 町・反・畝・歩	合計 町・反・畝・歩
瀧ノ上	(新)孫惣	・ 6・24	・ 3・5・02	・ 3・2・00	・ 7・3・26
大歩	平八	・ 2・4・14	1・5・0・04	・ 1・9・24	1・9・4・12

明治初頭

家号 (屋敷名)	居住者	田 町・反・畝・歩	畑 町・反・畝・歩	宅地 町・反・畝・歩	合計 町・反・畝・歩
瀧ノ上	阿部繁蔵	・ 1・4・18	・ 3・5・20	・ 3・5・28	・ 8・6・06
大歩	阿部弥次右エ門	1・3・0・26	1・7・9・27	・ 2・4・27	3・3・5・20
大歩	阿部弥七	・ 7・8・13	・ 4・3・14	・ 1・1・10	1・3・3・07



第8図 明治初頭の字「大歩」における土地所有の状態



第9図 明治初頭の字「上堰袋」における土地所有の状態

第5表 寛永18年(1641)と明治初頭の、字「上堰袋」における居住者の保有(所有)地積の比較

寛永18年

屋敷名	名請人	田	畑	宅地	合計
		町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩
上 関 袋	弥 市 郎	1・0・4・05	1・2・4・15	・1・7・10	2・4・6・00
関 袋	外 記	1・1・9・00	・6・4・08	・2・4・08	2・0・7・16
雪 馬	(新)勘三郎	1・4・3・07	・6・4・29	・1・5・09	2・2・3・15

明治初頭

家号 (屋敷名)	居住者	田	畑	宅地	合計
		町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩	町・反・畝・歩
上 関 袋	阿部甚之丞	・9・5・17	・6・1・09	・1・0・28	1・6・7・24
関 袋	松平種蔵	1・2・9・01	・5・2・21	・・8・02	1・8・9・24
雪 馬	渡辺茂右エ門	・8・2・15	・7・9・03	・1・8・23	1・8・0・11
川 前	阿部今朝之丞	・4・7・26	・6・6・09	・・8・29	1・2・3・04

文は、寛永の関袋屋敷外記の1719文と一致しており、外記の保有地が変化することなく、そのまま明治の松平種蔵家に継承されていることがわかる。このように、明治期初頭における4軒の所有耕地・宅地は、寛永期における3名請人の耕地・屋敷地の保有形態を示したものと言える。復原し得た3名請人(3在家)の屋敷地は、字の中央の微高地に南北方向に並び、コンパクトな列状の散居景観を呈していた。3名請人の保有耕地の分布は、雪馬屋敷新百姓勘三郎が、やや分散的傾向を示している点を除けば、それぞれ一円的で錯圃形態もみられない。勘三郎のやや分散的な傾向は、同一字内に他の名請人と並存した場合(Ⅱタイプの居住様式)における、「新百姓」の性格を示しているものと言えよう。これとは対照的に、関袋屋敷外記の保有耕地は、屋敷の下手・東側に一円的に拡がっている。

字上堰袋にみられた、かかる居住形態は、胆沢川の南岸に位置してほとんど灌漑用水に不便を生じない、恵まれた場所を占めた在家の居住形態を示すもので、典型的なⅡタイプの居住様式(1つの字に複数の寛永期名請人が居住)であった。屋敷名に加えて、明治期における姓も異にしていることが示しているように、3つの在家には、同族関係は存在していなかった。居住適地を選好して、在家が個々に入植、耕地開墾を進めた姿を示している。

Ⅲ まとめと考察

本稿において取り上げた事例は、いずれも、農業用水や居住地の条件に優れ、胆沢扇状地の中では早くから耕地開発が進められた地区である。したがって、前稿において詳述したように1字を基準にした居住形態を想定すれば、本稿で取り上げた字は、すべてⅡタイプ(1字に複数の寛永期名請人、すなわち中世において複数の在家が居住)の居住形態であった。これの分析からは、多くの示唆が与えられる。

まず、同一字内において、複数の寛永期名請人(在家)間に同族関係が存在していた場合、本・分家間の距離の遠近にかかわらず、分家は本家とは別の屋敷名を冠している。この事例は、前稿において字前田についてもみられたが、本稿で取り上げた字上鹿合における加藤系や、字大歩の阿部系の事例はもっと明瞭である。距離の近いものは、本家の屋敷地に隣接した場所に分家をしながらも、本家とは別個の屋敷名を冠している。それでも本・分家間に、寛永名請人当時(中世の在家役屋体制当時)においても、その保有耕地の錯圃関係もなかった。中世における在家の、1経営体としての独立性を示しているものと考えられるが、そもそも散居地域においては、本・分家関係の成立当時から、同族意識は稀薄であったと言えよう。

字上堰袋において復原される中世後期～近世初頭の耕地と屋敷の景観は、家系を異にする複数の寛永期名請人(在家)が、1つの字の中に居を構えた典

中 世

寛永検地帳時

明治期初頭

屋敷地の名称に起源するが、在家の名称でもある。

寛永検地帳には屋敷名と名請人名が登録される。「在家」の名称に由来する「屋敷名は」、「屋敷地の名称化」(地名化)している。

屋敷名は、「屋号」もしくは「屋号」と呼称されるようになっており、「屋敷地の名称」よりも、「属家的性格」を濃くしている。

- i) 1 在家 (1 寛永名請人) が、単一の経営体 (農家) から構成されていた場合。
- 在家 → □□屋敷……右エ門 → □□屋敷○○家 (家系が継承されている場合。)
- 絶家 → ×…… → □□屋敷△△家 (絶家後に、新しい居住者により、耕地と屋敷地が継承された場合。この場合、絶家前の本来の家系とは別の姓になる。)
- ii) 1 在家 (1 寛永名請人) が複数の経営体 (農家) から構成されていた場合。
- 在家 → □□屋敷……左エ門 → { □□屋敷○○家
□□屋敷○○家
- { 絶家 → { □□屋敷○○家
□□屋敷△△家 (複数の経営体 (農家) のうち、一部が絶家し、絶家後に、新しい居住者により、耕地と屋敷地が継承された場合。)

第10図 在家名・屋敷名の継承形態と、その性格の変化

中 世

寛永検地帳時

近 世

明治期初頭

- i) 中世以前に形成された同族関係 (中世以前の分家)
- 在家 → □□屋敷……右エ門 → □□屋敷○○家
- ↓ 分家
- △△在家 → △△屋敷……左エ門 → △△屋敷○○家
- ii) 近世において形成された同族関係 (近世の分家)
- 在家 → □□屋敷……右エ門 → { □□屋敷○○家 (本家筋)
- 分家 → □□屋敷○○家 (本家の屋敷地に隣接して分家した場合は、本家と同じ屋敷名を冠する。)
- 分家 → ××屋敷○○家 (本家から距離を隔てた場所に分家した場合には、本家とは別個の、その場所の名称を屋敷名として冠する。絶家した跡を踏襲する場合も同じ。)

※中世の在家名に由来し、寛永検地帳や安永風土記にも記載された屋敷名も、明治期以降の分家に対しては、これが用いられる事はない。

第11図 分家派生時における屋敷名の付記形態の、時代による変化 (分家が本家と同じ屋敷名を採るケースと、本家とは別個の屋敷名を採るケース)

型的なⅡタイプの居住様式の景観である。条件の良い場所を選好して、在家が次々と居を構えた結果、列状の散居形態を採っているが、保有耕地の錯圃もみられなかった。勿論、家系を異にしている在家であったから同族的紐帯も成立しなかった。

1 在家が1経営体（農家）から成っていた大部分の事例とは逆に、1 在家が複数の経営体（農家）から成っていた事例が、この地域でもみられた、中才（中在）屋敷の事例で、この場合、字を越えても同族関係にある2個の経営体から成っていた点が注目される。在家の保有耕地の面積が大きいため、複数の経営体から成っていたため、前稿における字金入道や八幡屋敷の事例と同じである。寛永検地に際して同じ屋敷名を冠したのは、当時は何らかの同族紐帯的意識が存在していたためと考えられよう。

上述のような中世において成立した本・分家関係とは違って、近世における分家は、その屋敷地が本家のそれに隣接している場合に限って、本家と同じ屋敷名（家号）を冠している。本家から離れた場所に分家する場合には、その場所の名称を付すために、本家とは別のものになる。近世の屋敷名は、中世から継承されたものにせよ、分家にもなつて新しく付されたものにせよ、地元で「家号（屋号）」と呼ばれていることが示すように、中世における屋敷名とは、その意義を異にしている。すなわち、中世における屋敷名とは、そこに居を構えた「在家の名称」（屋敷地を核としての諸役負担単位）であったのに対して、近世の屋敷名は、その屋敷地の名称、すなわち、屋敷地の地名なのである。したがって、中世から継承されているものについては、中世における在家の名称が、近世に至って屋敷名に転化したと言えよう（第11図）。

「安永風土記」にも記載されているほど長く継承されてきたかかる屋敷名も、明治期以降の分家に対して家号（屋号）として付す慣習は消滅している。したがって、中世の在家の名称に起源するほどの歴史を有する屋敷名も、幕末期の分布状態以上に拡散されることはないので、今日では、一種の文化的遺産としての性格を有している。

最後に、散居集落において同族的紐帯（「マキ」や「株内」など）が形成されない事情について、一言加えておきたい。

本稿において取り上げた字上鹿合や北中沢のように、中世もしくは近世において若干の分家を出すことが可能なほど広い字であっても、そこに同族的紐帯が形成されなかったのは、農業生産上その必要が

無かったからである。今日もなお中世の耕地景観を残している一関市の本寺（骨寺）地区の灌漑用水系統からも知りうるように、散居・小村落の居住形態を採っている地域では、僅かであるが傾斜が存在するために、網状の木田灌漑用水路が一面に展開している。したがって、「田越し灌漑」さえ行えば、どの場所でも潤沢な灌漑用水が得られた。田越し灌漑とは言っても、狭小な自己の保有（所有）水田を通り抜けるだけである。錯圃状態の耕地に対して番水や、それを伴うような田越し灌漑をかつて広く行ってきた西日本における集居村落の構造とは、本質的に異なっている。また、胆沢扇状地においては、網状の灌漑用水路は、大体「字」の境界になっている。したがって、灌漑用水路の一部を若干堰止めさえすれば、字の内側に用水を引き込むことは容易であった。字の中央に居を構えた在家農民は、潤沢な用水を容易に字内の水田に引き込むことができ、水田経営を柱とする営農に励んだ。潤沢な用水の清流の一部は、屋敷近くの溜り場にも導水され、「ツケイド（使い井戸）」と呼ばれて、生活上の雑用水にも利用されていたほどである。このような居住・営農形態を採っている以上、1 本の水田灌漑用水系統で本・分家が結びつく必要は生じなかったからである。

畿内を中心とした西日本では、中世後期から近世への移行期に、村落は惣村的地縁集団形態に変貌している。このような変貌をみなかった東日本の集居村落において今日なお同族的紐帯が残存しているのは、村内の1～2本の灌漑用水系統沿いに本・分家集団が並ぶ傾向⁹⁾が有り、水田経営上不可欠の灌漑用水を同族集団で共有している形態が多かったという側面を、見落すべきではなかろう。このようないくつもの同族集団が、1個の集居村落⁷⁾（近世の藩政村）を構成している。耕地整理後はこのような景観は消滅したので、同族的紐帯は、冠婚葬祭や内鎮守の祭祀、それに家の新築などの民俗的諸行事のみに残って同族的意識が構成農家に継承されている。このような形で、複数の同族集団から構成されている東日本における集居村落について、筆者はこれを仮に、「東日本型集居村落」と呼んでおきたい。有賀喜左エ門⁸⁾や福武直⁹⁾等が主たる研究対象としたのも、このタイプの集居村落であった。

これとは対照的に、散居・小村落においては、このような一連の現象はまったく生じなかった。筆者はこれを仮に、「東日本型散居村落・小村落」¹⁰⁾と名付けておきたい。本稿において取り上げた段丘面上に分布していた各字は、広大な扇状地の平坦面に

網状に多数分布していた字に比して、各字の面積は広がった。そのために、当初は、集居村落の原初形態にもなるいくつかの小同族集団の成立をみた。しかし、字内の灌漑用水路も田越し灌漑の便も良く、一般に1個の同族集団内の本・分家間の距離、同族集団相互の距離共に隔たっている。従って、強固な同族的紐帯を形成することも、いくつかの同族集団が凝集居住して集居村落に発達する現象も、生じなかった。原初的な居住様式が存続したまま、本質的には散居村落の構造と変わらなかったと言えよう。

「東日本型散居村落・小村落」の江戸時代における分家の派出による拡大のメカニズム等の諸点については、他地域の事例をも加えて、更なる検討を進めたい。

(謝辞)

御指導頂きました立命館大学名誉総長の谷岡武雄先生に厚くお礼申し上げます。胆沢町の各機関、また、長期に亘る研究になりましたために、今は懐かしい存在になられた方をも含めて、各位に深甚の謝意を表します。

図表等の作成を手伝って下さった新潟大学教育人間科学部・人文地理学教室の学生および卒業生(現公立学校教諭)に対してもお礼申し上げます。

(注)

- 1) 岡村光展「胆沢扇状地における近世の散居村落」人文地理43-4, 1991, 1-23頁。
- 2) 岡村光展「胆沢扇状地低位段丘面の開発と、近世の散居村落」, 新潟大学教育学部紀要, 人文社会科学編33-2, 1992, 149-158頁。
- 3) 岡村光展「保有地の復原から考究する歴史時代における散居村落・小村落の成立と構造—胆沢扇状地の事例・(1)—」, 新潟大学教育人間科学部紀要, 人文社会科学編7-1, 2004, 51-66頁。
- 4) 仙台藩による寛永年間の検地に関しては、通常形式の検地帳は1冊も見えていない。現存している検地帳はすべて、核になる屋敷名を記した左下に、名請人名を記載する名寄形式である。このことから、後者(在家役屋体制の枠組みを利用した貫文高把握)であった可能性が高い。
- 5) 鎌倉時代～室町時代において実際に営農をしていた農民(百姓)の屋敷に関して、これが大家

族経営であったことを裏付けるような大型建物の遺構の検出事例は、今のところ無い。現存している著名な「箱木の千年屋」(神戸市北区)にしても、建築学上の価値は高いが、これは郷の領主級の屋敷である。これらとは対照的に、鎌倉時代における一般農民の住居として、愛媛県歴史文化博物館内に復原されている家屋(今治市の片山内福間遺跡を復原)は、土壁の小さな住居である。

- 6) 岡村光展「近世越後農村における同族集団マキの復元的研究」人文地理34-4, 1982, 56-74頁, 同「越後における近世初期の農村集落」, 立命館大学文学部地理学教室・同地理学同友会共編『地表空間の組織』, 1981, 所収296-303頁。その他、筆者は、新潟県南魚沼市の農村を、多学生と共に多数探訪し、農家の分布と同族的紐帯を実地に調査した。
- 7) 中山間地の事例ではあるが、奥会津地方においては、集落内で1個の本・分家集団の屋敷が占める空間を、「坪」(小字に相当)と称している。1個の集落は、このようないくつかの「坪」から構成されている。各「坪」上に居を構えた本・分家間に、同族的紐帯であるマケ(マキ)が存在している。『田島町史・民俗編』, 11-16頁(福島県・会津田島町, 1977)など。
- 8) 有賀喜左エ門著作集X『同族と村落』未来社, 2001, 同V『村の生活組織』, 未来社, 2001, など。
- 9) 福武直『日本村落の社会構造』, 東京大学出版会, 1969, など。
- 10) 「東日本型集居村落」, 「東日本型散居村落・小村落」のいずれの類型にせよ、その対象範囲は、概ね北緯40°線以南の水田経営を柱にしてきた地域である。これより以北の、とくに内陸の盆地においては、「ボッタ播き」による常畑での2年3作の雑穀や豆類の栽培や、その常畑を補完する焼畑(アラキ)を営農の柱にしてきた。この地域では、限られた水田においてさえ、かつてはヒエの作付率が高かった。北緯40°線以北の地域の生活様式に関しては、歴史時代において方形の竪穴住居が長く存続するなどの諸点からも、むしろ北海道の擦文文化との共通性が指摘されている。